通巻513号

紅葉坂

教会だより

2012年3月号 No.13
横浜市西区宮崎町1
日本キリスト教団
紅葉坂教会
牧師 岩橋常久

説教

「いばらのかんむり」

岩橋常久

イエスがもはや何もお答えにならなかったので、ピラトは不思議に思った。
マルコによる福音書15章5節

沖縄の抱える問題を宣教課題として担う、というテーマで神奈川教区のオリエンテーションがあった。沖縄といえば基地の問題。従来の沖縄教区は、基地の存在は、沖縄県内の人たちの生命・財産にかかわる問題ととらえ、基地撤廃のために活動してきた。しかし、最近は、それよりも教会は伝道をするのであって、社会的な問題は個人的に、あるいは考えのあう仲間だけでやったらいい、という牧師・教会があって意見の衝突が起こっている。講師の村椿沖縄元議長は、沖縄の教会の宣教課題を歴史的に見ながら果たしていきたいと考えている。これに対して、歴史的に考えるのも大事だが、日本基督教団の教会は教団の信仰告白にあう信仰に人々を導く、それが伝道であり、教会の課題であると考える人たちがいる。この考えの背後にあるのは少人数の教会ではそういうことができない。仮にできたとしても社会的な考えの相違によって教会が分裂するという危惧だ。たしかに私自身少人数の教会の牧師であった経験からこの意見がでてくる背景はわかる。しかし、どの教会にも社会的な問題はある。それを無視して伝道はないだろう。反面、イエスに従って社会的な課題を担うということにも全面的に賛成しない。なぜなら、イエスに倣って生きることは私たちにはむずかしい、まず簡単にできないだろう。それは、十字架で殺されるのを結果として引き受けざるを得ない。この二つの考えを調停するのは困難な神学の課題だ。

ただ、教会は伝道だけをしたらいいというだけではどうにもならない信仰の課題がある。ある隠退牧師夫妻から、定期的に送られてくるメールが届いた。この人たちの息子も牧師。その教会の幼稚園は、放射能のために無期限休園になった。その両親からのメールは大体次のようにいう。両親は、休園手続きの書類作りの手伝いに福島に行ったが、被災地の人間関係がズタズタにされている事実に出会ったという。その方たちの息子は1年間　友人や恩師、教会などで奉仕をさせていただくことで癒されながら過ごしていた。しかし本人の気付いていない所で、親からみれば、息子は原発事故後、住居を失い、すべてのものをなくした中で一人孤独の命を神さまによりたのんで生きてきたことがわかった。そして息子の心の闇は深いと思った。「どうぞ　お祈りに覚えてください」とあった。「心の闇は深い」とある。私はその闇を理解できないが、信仰を持っている者にも闇があるという。これは、「教会は伝道をするのであって、社会的な問題は個人的に、あるいは考えのあう仲間だけでやったらいい」と言うことでは、どうにもならないのではないか。

ユダヤ共同体の裁判でも、ローマの裁判でもじっと沈黙されたイエスにもこの牧師と同じものかどうかは分からないが、闇があったかも知れないと思う。イエスの場合、その闇は神を信頼して活動してきた自分を裁判の場に連れ出す神の放置、あるいは神の沈黙として経験されているかも知れない。個人の問題とは言えない社会的な構造的な悪が彼を取り囲んでいる。そうならば、イエスがこの牧師の心の闇に共に入ってくれるのではないかと祈る。心に闇をもたらす社会的要因の作用を弱くするように力を合わせるのが必要なのではないか。それは、信仰共同体である教会に求められていることではないか。それも、その求めに十分に応じられない私たちは、ペトロのようにイエスに赦されながら、彼について行く。教会としても個人としてもである。いばらの冠は、屈辱の徴であった。それは私たちが実はたいしたことができない、ということでもあるように思う。あるいは、イエスの頭にかぶせられたいばらの冠は私たちかも知れない。彼はそれを脱ごうとはされなかった。そのようにして、彼は私たちを担う私たちの主であり、同伴者であり、励まし、力づける方。

（2012年3月4日合同礼拝説教要旨）